4. 各開催地についての報告

ここでは開催地ごとに、地域の特徴、受講者の状況、講座に対する反応、講座の地域での日本語学習支援の取り組みなどについて報告する。以下の説明の外国人数のデータは、出入国在留管理庁の「在留外国人統計（2020 年６月）」による。また、技能実習生の配属先の職種については、北海道経済部労働政策局産業人材課報告書（2020 年６月）による。

日高振興局

浦河町 〈9 月 19 日、20 日、26 日〉

１．開催地域の特徴

日高振興局管内には日高町、平取町、新冠町、浦河町、様似町、えりも町、新ひだか町の 7 町があり、管内総人口は約 6.7 万人である。そのうち、外国人登録は約千人で、その半数が浦河町（289 人）と日高町（284 人）に住んでいる。特徴的であるのは、在留資格「技能」が、浦河町 289 人中 228 人、日高町 284 人中 200 人となっていることであろう。これは、全道で約 1,430 人いる技能ビザ所有者の約 4 割を占め、ほぼ牧場などで仕事をする馬関係の専門家である。また、技能実習生も約 240 人おり、農業、漁業関係を中心に実習を行っている。

特に、会場となった浦河町では、在住外国人の約 8 割が牧場関係で仕事をしており、他地域では多い技能実習生が少ない。なかでも、国別でインドが最も多いのも特徴のひとつである。2020 年 4 月に「浦河町日印協会」が発足し、在住外国人との交流などに町民の問題意識が向けられ始めたころに時を同じくし、今回の講座の開講となり、さらに多文化共生の意識が高まっている。

２．受講者の状況

今回の講座には 16 人の申し込みがあり、１・２回目が 2 日連続になってしまったにもかかわらず、毎回ほぼ全員の参加であった。年代を見ると、20 代（2 人）、30 代（1 人）、40 代（2 人）50 代（2 人）60 代以上（9 人）で、比較的年齢が上の受講者が多かった。職種として特筆すべきなのは、町議会議員が 4 人参加していたことである。その中には、「浦河町日中協会」「浦河町日印協会」の両会長も含まれており、浦河町の国際交流の中心的な方々が参加されていた。その他、近隣の様似町から、漁業協同組合で実際に技能実習生の指導を担当する方の参加もあり、半数以上の受講者が身近に外国人がいて日本語学習支援の必要性を感じていると答えている。また、ほぼ全員が日本語教育や外国人との交流に興味があると答えている。

講座の最終日に行った外国人ゲストとのセッションも、5 か国 11 人のゲストを迎え、今までなかなか声をかけることができなかった近くに住む方とのおしゃべりは大変盛り上がっていた。

しかし、在住外国人の多数を占める牧場などで働く外国人の参加はなく、逆に、いわゆる「馬関係以外の外国人」と初めて接した、こんなに色々な国の方が住んでいるのがわかった、という声もあった。

３．受講者の反応

身近に外国人の多い地域であり、受講者の外国人との交流や日本語教育についての関心は高かった。講座終了後のアンケート（回答 14 人）では、全員が「有意義な内容だった」と答えている。「日本語を教えてみたいと思った」という項目では、「そう思う」が 7 人、「ある程度そう思う」が 7 人で、受講者全員が教えることに前向きであった。また、その内訳（複数回答）では、「教室を作りたい」(8 人)「教室があれば参加したい」（7 人）「個人的に教えたい」（2 人）となっており、日本語学習支援に積極的な意欲が感じられる。今後「やさしい日本語を学ぶ講座」や「外国人との共生や異文化理解について講座」の開催への意欲も高い。

講座の開催前から、すでに牧場関係者により日本語教室開設の予定が決まっており、3 回目の前日から教室が開始されたが、受講者同士での呼びかけもあり、今後も教室への参加につながっていくように思う。

４．講座後の動き

2020 年 9 月から牧場主が中心となり始まった日本語教室が、8 回行われた。参加した学習者は、全て馬関係の牧場で働くインド人 5-6 人であった。日本語教育経験者 1 人の他、毎回 6 人程度の講座受講者がお手伝いで参加し、前半は教科書を使い勉強し、後半はマンツーマンでわからないところの確認やフリートークを行うという形式で行われた。職場の日本人以外と話す機会が全くないため、非常に楽しそうに参加していた。今後は、日本語教室以外にも、インドカレーを食べる会や、クリケットでの交流を企画していきたいとのことである。

また、別の受講者もベトナム人獣医 2 人に個人的に日本語能力試験対策の勉強会を始めた。希望者がほかにもいるため、試験が終わったあとも、日本語学習の場を続けていきたいとのことである。

その他、近隣の町で行われている日本語教室の視察なども行われ、今後は、浦河町から日高管内全体へと広がりつつあるようである。

Coca-Cola

釧路総合振興局

釧路市 〈9 月 26 日、10 月 3 日、10 日〉

1．開催地域の特徴

釧路管内は、農業、林業、水産業の第 1 次産業に加え、食料品製造業や石炭産業、紙・パルプ産業、観光業などが盛んで、それぞれの産業に従事する外国人も増加している。管内の外国人は 1,580 人で、その 6 割が釧路市（975 人）に集中しており、他に厚岸町（159 人）、標茶町（102 人）、白糠町（98 人）、浜中町（82 人）などに分散している。資格別では「技能実習」が 64.7%と最も多く、食料品製造業、農業、建設関連工事業などに従事している。管内には複数の技能実習生の監理団体があるが、日本語学習支援に関しては情報が得られなかった。なお、国籍別ではベトナム（787 人）が約半数を占め、フィリピン（288 人）、中国（185 人）、韓国（110 人）などとなっている。

今回会場となった釧路市では、外国人の 58.6%が「技能実習」だが、「技術・人文知識・国際業務」「技能」、「特定活動」、「日本人の配偶者」、「家族滞在」など様々な立場の人も多く、生活のなかでの日本語学習のニーズも高いと思われる。外国人への支援に関しては、釧路国際交流の会が JICA の海外研修生の受け入れ協力をはじめ、在住外国人と市民の交流、大型クルーズ船入港時の歓迎行事などの活動に加え、日本語学習のサポート活動も行っている。さらに釧路市内の「夜間中学くるかい」でも外国人への日本語指導の経験がある。しかし、市内の外国人全体の状況や日本語学習に対するニーズを把握するのは難しく、今回の講座で参加者それぞれの外国人との接触や交流のようすを紹介し合うことで、地域の状況が少しずつ明らかになってきた。

2．受講者の状況

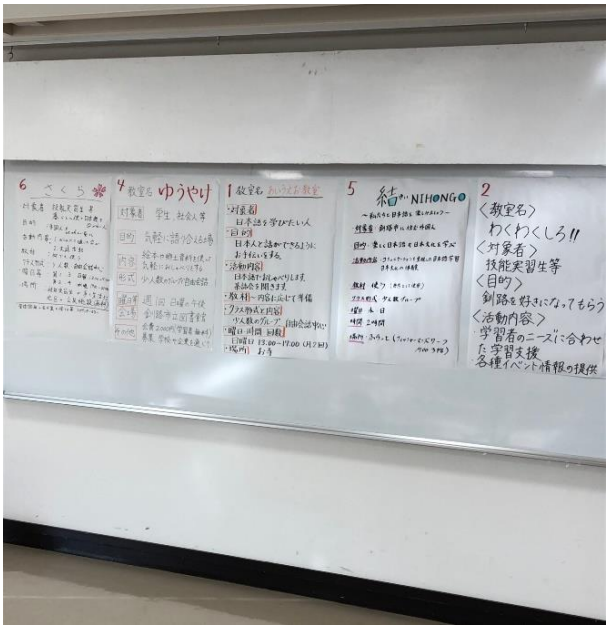
今回の講座には 47 人の申し込みがあり、各回平均 40 人ほどの参加があった。年代を見ると、20 代（6 人）、30 代（6 人）、40 代（4 人）50 代（6 人）など各年代に分散している。職種としては公務員、会社員、教育関係者、自営業、その他となっており、釧路総合振興局や釧路市役所の職員、国際交流の関係者、学校・大学・教会・介護施設・保育所などで外国人と接する機会のある人などさまざまな立場の人が集まった。講座の最終日に行った外国人ゲストとのセッションも、9 か国 14 人の多彩なゲストを迎え大変な盛り上がりを見せた。毎回、釧路総合振興局や釧路市役所の関係部署からの見学もあり、外国人との多文化共生に向けての関心の大きさがうかがえた。

３．受講者の反応

国際交流の関係者が多かったこともあり、全体的に参加者の問題意識や日本語教育についての関心は高かった。講座終了後のアンケート（回答者 40 人）の、「日本語を教えてみたいと思った」という項目では、「そう思う」が 18 人、「ある程度そう思う」が 19 人で、参加者の大半が教えることに前向きであった。また、その内訳では、「教室を作りたい」(6 人)「教室があれば参加したい」（25 人）「個人的に教えたい」（14 人）となっており、今後の日本語学習支援の大きな可能性が感じられる。今回のような講座の継続への要望も多い。実際に教会関係者からは日本語教室の開設の意向も示されている。その一方で、「講座を発展させる形で、どのような教え方をすれば効果的なのか、学べるような講座があるといい」「外国人の方ともっと話をする機会を設けてほしい」「外国人ゲストとのおしゃべり体験を一歩進めて、模擬教室を体験してみたい」「レベルアップのために、「やさしい日本語を学ぶ講座」を開いてほしい」「外国人を交えて実践的にやさしい日本語を使って話せる機会がまたあるとよいと思う」など、日本語学習支援についての実践的な研修や外国人との日本語での交流を望む声が多かった。講座の参加者がそれぞれの場で活動に踏み出すために、さらなる実践的な研修が必要であろう。また、参加者が多かったこともあり、講座の中で参加者の交流や情報交換が十分にできなかった。参加者同士での活動を始めるための呼びかけや、活動の交流や情報交換ができるような場が今後必要になるであろう。

４．講座後の動き

講座の内容を日本語学習支援に生かす動きがみられる。釧路国際交流の会では、日本語サポート活動に対象者別の記録用のカードを作る、対面のサポートで「やさしい日本語」によるコミュニケーションを意識するなど、講座で学んだことを早速活用している。また、釧路市役所からの参加者も市役所が発信する外国人市民向けのお知らせに「やさしい日本語」を取り入れるような働きかけを始めている。最近になって、日本語サポートを利用していた ALT（外国語指導助手）が自分の国や日本とのつながりについて日本語で話す場をもった。今後も引き続き他の外国人が日本語で話をする予定である。コロナの問題で参加が難しい外国人も多いが、他の外国人が交流の場を求めて日本語サポートにやってきている。


6 さくら
4 教室名 ゆうやけ
対象者 学生 社会人等
目的 気軽に話し合える場
内容
形式
1 教室名 おいでよ教室
・対象者
日本語を学びたい人
・目的
日本人と話ができる!
お手伝いする。
・活動内容
日本語を話せるようにします
基礎から聞きます
・教材 一四谷と共にて準備
・クラス形式 西谷
・1人数の グループ 自由会話中心
・曜日 月曜 木曜
・日時 13:00~17:00 (月2回)
・場所 お寺
5 結 NIHONGO
2
〈教室名〉
わくわくしろ!!
〈対象者〉
技能実習生等
〈目的〉
釧路を好きになってもらう
〈活動内容〉
・学習者のニーズに合わせた学習支援
・各種イベント情報の提供

根室振興局

別海町 〈9 月 27 日、10 月 4 日、11 日〉

1. 開催地域の特徴

根室管内は、沿岸部で水産業、内陸部では酪農業が盛んである。根室管内の外国人は、998 人で、ほぼ別海町（419 人）と根室市（326 人）に集中している。他に中標津町（115 人）、標津町（100 人）、羅臼町（38 人）である。資格別では「技能実習」が75.1%（749 人）と最も多く、永住者（61人）特定活動（60人）である。 平成20年度ごろには中国人研修生が多数を占めていたが、現在では中国（44人）に対してベトナム（649人）が主流になってきている。

別海町には、主にフィリピン、ベトナムから酪農関係への技能実習生が多く、2019 年の調査では 333 人であったが、2020 年 6 月末の統計では、419人に増えている。監理団体は別海町の酪農家が集まり設立された北海道近代酪農協同組合1か所で、東南アジアからの研修生を積極的に受け入れている。

また、隣の中標津町では、2021年度に開校予定の日本語学校があり、開校後は外国人と地域との交流などが見込まれていることから、中標津町役場や日本語学校関係者の参加があった。

２． 受講者の状況

今回の講座には23人の申し込みがあり、各回20人ほどの参加があった。地域別では、中標津町（12人）、別海町（7人）、根室市（3 人）、標津町（1 人）であった。また、60代（9人）50代（3人）と、やや年代が高かった。主な属性としては中標津町の日本語学校関係者（3 人）、酪農関連（2 人）、技能実習生受入れ団体（2 人）、医療関連（3 人）、町会議員（2人）などである。日々外国人技能実習生などと接する機会のある人から、観光ガイド、日本語教育に関心がある人など様々な立場の人が集まった。根室市内からは振興局職員と文化庁の令和2年度「生活者としての外国人」のための日本語教室空白地域解消推進事業の担当者の参加があった。この担当者からは、具体的な日本語教室のイメージを描くことができたというコメントがあった。

講座の最終日に行った外国人ゲストとのセッションは、技能実習生 ALT（外国語指導助手）などが参加して活発な活動が行われた。

３． 受講者の反応

中標津で開校予定の日本語学校関係者からは「生活や文化など、日本語学校で教えられないことを地域の皆さんに手伝って頂けることがわかってよかった」という言葉があり、同じ中標津からの参加者は「中標津で外国人が増えたときにやさしい日本語を使ってコミュニケーションを取ってみたい」と述べている。このように日本

語学校に外国人が来る前から地域での受け入れの機運が高まったことは、来日する外国人や学校関係者にとって心強いことであろう。

ゲストとの会話からは「どうやって話したらよいか不安だったが、日本語だけで大丈夫だとわかって自信がついた」「心で話すことを大切にしていきたい。楽しく話すことができて良かった」「語学力がなくてもできることがわかったので、日本語教室の開設をがんばりたい」など、学習者との実践的な体験が自信になったことが分かった。

講座終了後のアンケート（回答者 15 人）の、「日本語を教えてみたいと思った」という項目では、「そう思う」が８人、「ある程度そう思う」が７人で、参加者の全員が教えること前向きであった。また、その内訳では、「教室を作りたい」(４人)「教室があれば参加したい」(12 人)「個人的に教えたい」（６人）となっており、「地域にすぐ教室を作れそう」「実習生のコミュニケーションを手伝いたい」などの積極的な意見が多く、今後の日本語学習支援の大きな可能性が感じられる。全員が今後の講座の継続を要望していることからも、継続的な支援が必要であると言える。

また、今回の研修を通して「同じことに関心がある人に多くで出会えて良かった」「ここで知り合いが増えたことも大きな収穫だった」という意見があったように、この講座が地域の人を結ぶ活動になり「それぞれの立場に応じたアプローチが必要なことを実感した。地域でどんなことができるか考えていきたい」という意見を引き出せたことに、手ごたえを感じた。

4. 講座後の動き

牧場で働いている人は、これまでも技能実習生の支援を行ってきたが、コロナ禍で集まって勉強するのは難しい状態で、オンラインでの学習を考えているそうである。オンラインのフォローアップ講座を受けたことにより、オンラインでの学習の可能性を実感してもらうことができたのではないだろうか。また、この講座で学んだ「やさしい日本語」を牧場内の日本人に知ってもらい、日本人が外国人に使う言葉を考え直したいと述べている。

中標津の日本語学校関係者は「地域で日本語支援をしようと思っている人がたくさんいることが分かって温かい気持ちになった」と述べていて、町の人は「若い外国人がたくさん入ってくると、町としてどんなふうに変わっていくか興味がある。楽しみである。」と述べている。中標津では、これから日本語学校を中心に町内でいろいろな学習支援の活動が行われるのではないかと思われる。

楽しく日本語を学ぼう
毎週日曜日
10:00~15:00
場所：中央公民館
お金はいりません
日本語サークル 虹

十五夜

オホーツク総合振興局

網走市 〈10 月 17 日、24 日、31 日〉

１．開催地域の特徴

オホーツク総合振興局には 18 市町村があり、総人口は約 31 万人である。知床の世界自然遺産を始め、観光地としても人気が高いが、農業、林業、水産業も盛んである。ここでは、約 2,490 人もの外国人が生活しており、14 振興局の中でも石狩振興局に次いで技能実習生が多い地域である。その多くは、中国やベトナムからの技能実習生で、主に食料品製造業、農業で実習を行っている。

会場である網走市では、327 人の外国人が生活しており、そのうち 210 人が食料品製造業などの技能実習生である。オホーツク総合振興局内では、紋別市（463 人）、北見市（461 人）、に次いで 3 番目に外国人登録が多い。近隣の市町村にも多くの外国人が生活しているため、外国人が非常に身近で生活している地域であるが、接点が少なく、交流の機会は非常に少ない。

２．受講者の状況

今回の講座には 29 人の申し込みがあり、各回平均 22 人ほどの参加があった。網走市の他、北見市（6 人）、斜里町（2 人）、大空町（1 人）からの参加があった。年代を見ると、30 代（1 人）、40 代（7 人）50 代（4 人）60 代（6 人）で、40 代 50 代の受講者が多かった。職種としては公務員、会社員が多く、仕事を持っている受講者が多かった。また、身近に外国人がいて日本語学習支援の必要性を感じている人よりも、日本語教育や、外国人との交流に関心があるという受講者が多かった。身近には外国人がいないが、いつか学習支援をしてみたい、交流してみたいという理由で参加している方が多かったようである。

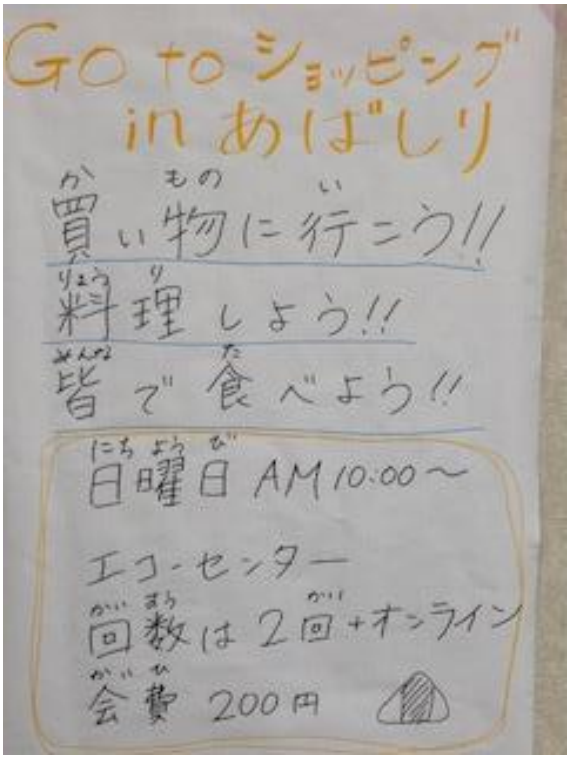
講座の中で、数人で話し合う場でも、非常に活発に意見が出され、発表をする場面でも、まとまりのあるしっかりとした意見を話す方が多く、「学ぶ」ことに慣れている受講者が多かったようであった。

3 回目に行った外国人ゲストとのセッションでは、監理団体の方が 2 か所の実習先を紹介してくださり、企業の方が 5 人の技能実習生をまとめて送迎してくれるなど、非常に協力的であった。参加した外国人ゲストの方は、仕事先でほとんど日本語を話すことがなく、非常に楽しそうに話していた。グループを変えて新しい人と話すたびに、どんどん上手になっていくのが目に見えてわかり外国人ゲストにとっても、多くの学びがある場となったと思われる。

３．受講者の反応

身近に外国人がいるという受講者が少なかったのもあり、全体的に知識などを学びたいが支援を始めるのには消極的な受講者が多かった。講座終了後のアンケート（回答者 20 人）の、「日本語を教えてみたいと思った」という項目では、「そう思う」「ある程度そう思う」を合わせると 16 人であったが、その内訳では、「教室を作りたい」(2 人)「教室があれば参加したい」（7 人）「個人的に教えたい」（4 人）となっており、日本語学習支援の場がもしあれば参加したい、というやや消極的な回答であった。

今後については、半数以上が「日本語の教え方講座」「やさしい日本語を学ぶ講座」「外国人との共生や異文化理解についての講座」への参加を希望しており、次回を望む声も多かった。今後の活動について受講者同士での交流や情報交換が行われており、外国人ゲストとも、今後のつながりができた受講者もいた。広い地域であるため、今後は、それぞれの市町村での活動の広がりが期待される。

４．講座後の動き

２人が参加されていた斜里町では、さっそく「斜里町国際交流の会」での交流会が行われ、講座で知り合った他地域の方の参加もみられた。講座に参加の 2 人から会のメンバーへ、講座内容などの報告もなされ、「受講したかった」との声もあったそうである。その後、すぐに一人は技能実習生との「手話を教えながらの交流」を始め、もう一人は日本語の勉強会を立ち上げ、すでに数回日本語の勉強とおしゃべりを行っているそうである。今後、希望者も多くなりそうなので、支援者を増やし、勉強会を広げていきたいとのことである。